

## V 臨時的調査研究（1） ヒノキコンテナ苗の生育実証調査

（実施期間：平成30年度 予算区分：県単 担当：富森加耶子）

### 1 目的

鳥取県内ではスギコンテナ苗の生産体系はまとまりつつあるが、ヒノキは県内の苗木生産者がそれぞれに異なる種類のコンテナ苗を生産している。そこで、ヒノキのコンテナ苗と裸苗を植栽し、各種苗木の特性や植栽後の成長への影響を把握する。

### 2 実施概要

#### （1）方法

2017年11月に県内の苗木生産者が育苗した2年生ヒノキの各種苗木植栽した（植栽密度2,500本/ha）。苗木は、コンテナ苗5種類（マルチキャビティ150cc、同300cc、生分解性ポット150cc、同300cc、インナーポット300cc）各50本、対照として裸苗を35本、合計285本を用いた。

植栽から1年後の2018年に枯死状況を目視し、活着状況を調査した。各種苗木の成長量は、植栽直後の2017年11月と植栽1年後にすべての植栽木の樹高と地際直径を測定した。

#### （2）結果

活着率は裸苗で100%、コンテナ苗で最小86%（インナーポット300cc）、最大94%（マルチキャビティ300cc）であった。植栽1年後の樹高と地際直径は、裸苗が最も大きかった。年間の成長量は樹高、地際直径ともにインナーポット300ccが最も大きかった。同じコンテナ容器を用いた時の容量（150ccと300cc）による年間成長量の差はなかった。植栽時の形状比（苗の地上部と地下部のバランス）はマルチキャビティコンテナ苗が顕著に大きく地下部の成長が乏しい状態だったが、植栽1年後はコンテナ苗の形状比が減少し、裸苗との差が小さくなった。

### 3 結果の図表と研究の様子

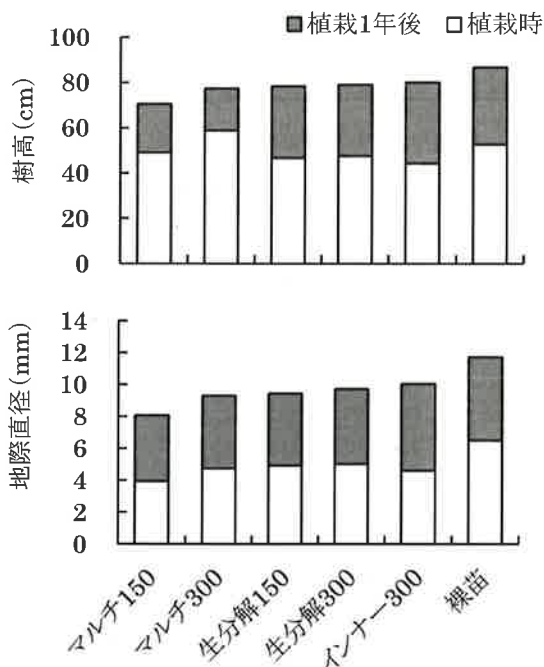


図1 各種苗木の樹高と地際直径

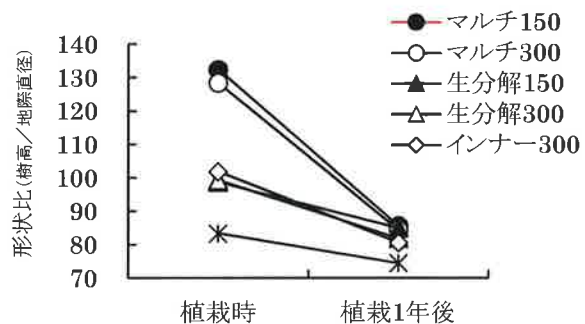


図2. 形状比の変化



写真. 左からマルチキャビティ、生分解性ポット、インナーポット